

氏名・(本籍地)	浅野秀夫(東京都)
学位の種類	博士(仏教学)
学位記の番号	甲第97号
学位授与の日付	平成27年3月16日
学位論文題目	般若経から『瑜伽師地論』菩薩地、 『解深密経』への空性思想の展開
論文審査委員	主査 廣澤隆之 副査 西村実則 副査 大南龍昇

浅野秀夫氏 学位請求論文審査報告書

「般若経から『瑜伽師地論』菩薩地、『解深密経』への空性思想の展開」

論文の内容の要旨

本論文は空性思想の初期唯識思想における展開を般若経と龍樹の思想との思想史的關係に即して探究したものである。特に『解深密経』の成立において従来の空性思想がどのように継承され、批判的に止揚されたかに焦点をあて、『解深密経』の制作意図、すなわち論者のいう「瑜伽行派の經典戦略」を思想史的に解明する。

本論文の構成・梗概は以下の通りである。

序論

第一節 はじめに

歴史を解釈する視点を明示し、仏教思想史を取りあげ、しかも般若経、龍樹、初期瑜伽行派の関連性を解明する動機を述べる。

第二節 使用テキスト

般若経の展開を概観し、コンゼ、梶山雄一の説を紹介し、初期般若経の『八千頌般若経』を主として考察する妥当性と『二万五千頌般若経』を参照する理

由を示す。『瑜伽師地論』に関してはシュミットハウゼンと向井亮の説を参考に「菩薩地」を中心に初期唯識思想を考察する根拠を示す。そしてその成立年代からして、先行するテキストとして龍樹の『中論偈頌』を想定し、「菩薩地」における龍樹の空性思想の影響を考察する根拠を示す。「菩薩地」に続き、『瑜伽師地論』有尋有伺地が成立し、その後に『解深密経』が成立し、唯識思想の全体構造が示され、初期瑜伽行派の思想が整ったのであり、そこに『解深密経』を中心に考察する根拠があるとする。

第三節 先行研究と課題

ここでは『瑜伽論』菩薩地と『解深密経』に関する先行研究を取りあげる。特に本論文に関係する三性説を中心に先行研究を検証する。そして本論文の基本枠組みである般若経—龍樹—初期唯識の關係に焦点を絞る妥当性を導き出している。特に荒牧典俊と廣澤隆之の研究手法、思想解釈の相違をヒントに論者の独自の視点を確保している。

第四節 研究方法

思想史研究の意義を前節までで確認した上で、その応用として般若経の主題が『解深密経』にどのように組み込まれるかについて、説法者と聴聞者の役割に注目する。般若経に登場するスプーティやダルモードガタ菩薩が『解深密経』における空性思想、勝義諦思想を語る主役として登場することの思想史的展開を視野に入れつつ、そこに『瑜伽論』菩薩地がどのように介在するかという思想史解釈の方法を提示する。

本論

第一章 般若経の空性理解

第一節 世尊とスプーティとの対話

スプーティが釈尊に代わって空性思想を説く般若経の特徴を先ず指摘し、先行研究を参考にしてそこに大乘仏教の特徴の一つを指摘する。そしてそこで論じられるアビダルミックな法の分類に即して瞑想体験のなかで空性を体験し理論化する思想を『八千頌般若経』において検証する。ここでは五蘊＝一切法の特徴を空であるとし、それは言語化し得ない存在の言語的分節化の所産である法として顕現していることを示す。そして法が本質的に「言葉で語れない」ことに注目する。この基本姿勢が初期唯識の思想にどのように展

開したかを探る本論の序章としての意義づけがされる。

第二節 スプーティのジレンマ

釈尊と語るスプーティが空性思想にこだわることに論者は注目し、そのようなスプーティを叱責する釈尊の説法の意義を解釈する。それは「完全な智慧（般若波羅蜜）」に向かう修行において空であることの言語化まで否定する大乘菩薩行にスプーティが入りきっていないことを暗示しており、そこにスプーティのジレンマを読みとる。そしてそのジレンマはスプーティに「自覚を呼び起こし、声聞から菩薩への自己変革を促す」もので大乘の優位性がそこに述べられていると解釈する。

第三節 ダルモードガタ菩薩の説法

この章は『解深密経』にも登場する菩薩が説法をするということで注目される。この章にこそ『解深密経』に接続する思想の原型が認められるという想定のもとに解説されている。般若経では絶対的な実在を言語化できないという空性思想の基本的立場から、言語による虚構（戯論 prapañca）を強調するが、しかしそのような実在把握の瞑想体験が重視される。したがって利他に精進する菩薩行の実践的意義づけが空性思想と結びつけて主張されなければならない。このような実践を説くためにダルモードガタ菩薩 Dharmodgata が登場していると論じられる。

第四節 まとめ

前三節の梗概を示しつつ、スプーティの登場によって般若経の論理的枠組みが提示され、ダルモードガタ菩薩によって衆生を實踐に促す説法があり、両者が相俟って般若経の骨格を構成しているという理解を示す。そしてこの枠組みが『解深密経』に連なることを示唆する。

第二章 『菩薩地』の空性理解

第一節 阿含経と般若経の継承

この章では『瑜伽師地論』菩薩地 Bodhisattvabhūmi の空性思想を検討する。本節では「菩薩地」が阿含経と般若経の空性思想を継承している思想史的展開の大枠を示す。まず阿含経と『瑜伽師地論』声聞地 Śrāvakabhūmi との関係を示す。その際に阿含で示される十二分教(九分教)の分類における「契経」の定義に注目する。そこでは「空性相応 suññatapaṭisaṃyutā」が説かれるが、

それは「声聞地」を媒介として「菩薩地」に導入されたとする。そして「菩薩地」ではその空性相応經典として、阿含にはない特質を列挙しており、それらは明らかに般若經の思想であると断定する。そこには「菩薩地」が依拠する般若經が非仏説であると批判されることを回避しつつ、瑜伽行派の空性思想を確定する方向が示されたことを意味すると結論づける。

第二節 離言自性

「菩薩地」の空性思想の根拠となる阿含經を引用するが、その中でも『小空經』が重視される。このことはすでに長尾雅人によって解明され、学界で高く評価されている理解であるが、その核心は「余れるもの *avaśiṣṭa*」という概念である。その「余れるもの」こそ「眞實義品」において「離言自性 *niriabhilāpyasvabhāva*」あるいは「事 *vastu*」と等置される概念であるとし、空性思想の瑜伽行派における展開のキーワードを見いだす。しかもその「離言自性」あるいは「事」は阿含以来の伝統である三三昧と関連づけられる。その実践は「声聞地」から継承するものであろうと推測する。ここに言語による虚構 *prapañca* を否定することに傾斜しがちな般若經を継承しつつ、「言語では表現できない」実在としての眞如を体験する瑜伽行派の空性思想が確定すると論者は述べる。

第三節 法無我

ここでは空性思想を瑜伽行派の立場から理論的にまとめている「眞實義品」を中心に考察する。そしてこの品の冒頭に説かれる四種眞実を詳細に検討し、「煩惱障淨智所行眞実 *kleśāvaraṇaviśuddhijñānagocara tattva*」という四聖諦觀察を核とする声聞乗の智のあり方を超える大乘の空性思想の眞実が「所知障淨智所行眞実 *jñeyāvaraṇaviśuddhijñānagocara tattva*」であり、それは「法無我に関する知によって」知ることであり、その知の対象が「離言自性」であり「唯事 *vastumātra*」であり「唯眞如 *tathatāmātra*」であることを確認する。このように法無我体験にもとづく実体験を空性思想と結びつけることで瑜伽行派は「声聞乗から大乘への飛躍」を可能としたと結論づける。

第四節 龍樹への批判

前節までに般若經における「言葉では表現できない」という否定表現を継承しつつ「菩薩地」では「言葉で表現できない自性がある」という肯定表現

が注目された。このような「菩薩地」における表現への展開の背景には龍樹 Nāgārjuna に典型的な空性思想への批判があると指摘する。龍樹は般若経に依拠しつつ、般若経が批判しなかったアビダルマの十二縁起説の増上縁による縁起構造を否定し、縁起と空性を等値した。龍樹は言語を伴う思考の枠組みにおける概念の縁起関係を問題にしたが、「菩薩地」は般若経と同様に、言語化される以前の实在を肯定的に捉え、龍樹の系統の思想を虚無論者 *pradhāno nāstikaḥ* と断罪する。言語化された法の事態は無であり、その言語化の原因 *nimittā* である事象 *vastu* は存在するという立場で非有非無という瑜伽行派独自の中道を龍樹を批判しつつ思想的に確立したとする。これは説一切有部の有の思想と龍樹の無の思想の止揚でもあると結論する。

第五節 龍樹への共鳴

前節では龍樹を批判した視点を検証したが、「菩薩地」は他方で龍樹の思想を肯定的に継承し、思想を展開していることを指摘する。特に龍樹が『中論偈頌 *Madhyamakakārikā*』第 24 章における勝義諦と世俗諦の説示が「菩薩地」に継承されているとする。それは「菩薩地」真実義品のキーワードである離言自性 *niriabhilāpyasvabhāva* が勝義諦 *paramārthasatya* とも等値されていることにも見られるとする。すなわち勝義諦は非有非無でありつつ、その事態を概念設定 *prajñapti* することで仏教は思想化されるのである。この問題は大乘における釈尊の究極の体験とその言語化との関係という根本的な仏教理解の課題であり、それが龍樹と瑜伽行派において大乘仏教の思想として深化されているとみる。

第六節 まとめ

般若経を正統に継承していると主張する「菩薩地」の立場を般若経との比較、そして龍樹の思想との関係において思想的に検証する。特に龍樹への批判と肯定の立場を思想的に明確に論理化することで瑜伽行派の大乘仏教としての思想の確立が見られるとする。そして龍樹の思想を継承しつつ瑜伽行派的に展開することで『解深密経』を準備していると指摘する。またインド大乘仏教思想における瑜伽行派と中観派の関係が中軸になる思想史的必然性にも言及する。

第三章 『解深密経』の空性理解

第一節 般若経と『菩薩地』の継承

『解深密経 Saṃdhinirmocanasūtra』を般若経と「菩薩地」の空性思想との関連に注目して論を展開するという以下の節の序文として記述する。特に般若経で説法する菩薩として登場したダルモードガタは『解深密経』では釈尊に教えを質問する役割に転換していること、『解深密経』で唯一菩薩ではないスプーティへの説法が行われていることに注目して『解深密経』の空性思想を「勝義諦相品」を中心に検証する。

第二節 ガムビーラールタサンディニルモーチャナ菩薩の説法

『解深密経』勝義諦相品は釈尊が法を説く前に、菩薩間における問答が序章として設定されている。そこにおいて説法するのは解甚深密意 Gambhīrārthasaṃdhiromocana 菩薩である。この菩薩名が『解深密経』の主意を担う saṃdhiromocana であることを重視する。ここでは龍樹の思想では釈尊の究極体験が言語化される根拠を論理化できていないが、ここでは言語化できない事象そのものが聖智 āryajñāna と聖見 āryadarśana によって洞察され、その言語化された世界が「認識を形成する力によって作られた世界の在り様」としての有為 saṃskṛta であり、その主体が行 saṃskāra であり、それが言語化を働かせる原因 nimitta との関係を詳述する。その考察のもとで saṃskāranimitta について先行研究を批判的に参照しつつ、それを「行（認識を形成する力）の生み出した言葉をもたらす原因」と訳すという独自の理解を示す。この言語化のメカニズムが聖智・聖見という法性の直接体験と相即することで釈尊による究極の体験の言語化が単なる虚構に陥らず、そこに深い意図を読みとる『解深密経』の基本的態度が示されているとする。

第三節 世尊のダルモードガタ菩薩への説法

ここでは「勝義諦相品」の第2章にあたるダルモードガタ菩薩と釈尊の間答を考察する。そこでは「一切法相品」を参照しつつ、相 nimitta と無相 animitta の考察が世俗と勝義に対比できるとする。そこで「一切法相品」や『瑜伽論』三摩呬多地（本地分）における三性説を詳しく検証し、「勝義諦相品」が般若経と「菩薩地」から継承した空性思想を『解深密経』が三性説として論理化する「中継点」とであるとみる。そのために般若経で説法した

ダルモードガタ菩薩を聴聞役にし、般若經を超える視点を『解深密經』が獲得しているという独自の見解を示す。

第四節 世尊のスヴィシュッダマティ菩薩への説法

スヴィシュッダマティ Suviśuddhamati 菩薩が釈尊と問答をする章を考察する。そこでは前節までに述べられた行 saṃskāra と勝義 paramārtha とが総括的に考察される。行は言語認識と関連するので「雑染という特質 saṃkleślakṣaṇa」であるとされ、法無我の体験がその雑染を離脱することであり、真如あるいは勝義の体験であるとされるのであるから、勝義に「清浄という特質 vyavadānalakṣaṇa」を認めることができる。このことを「一切法相品」と比較して、遍計所執性を円成実性に転換する「三性説を構造的に理解する道を切り開いた」と結論づける。

第五節 世尊のスプーティへの説法

ここでは『解深密經』で釈尊と問答する唯一の声聞であるスプーティの登場と役割に注目する。論者は般若經において仏陀の威神力を承けて空性を説くスプーティさえも、『解深密經』では空性そのものである勝義諦がいかなるものであるかについて、釈尊から教えを受ける立場であることを重視し、そこに声聞スプーティの大乗への転換のジレンマが描かれていると解説する。瑜伽行派はスプーティを代表させて声聞の「菩薩化を演出し」その「ジレンマからの脱却を目論」み、「大乗の優位性を顕示」したとする。このような理解により、阿含經と般若經は未了義であるとする『解深密經』の三時教判が可能になったと考察する。

第六節 勝義諦と真如

今までに論述した内容を中心概念である「勝義諦」と「真如」に焦点を当てて考察する。「勝義諦相品」における勝義の特質をまとめ、そこで勝義＝真如と理解されることを「分別瑜伽品」における七種真如と関連づけて考察する。そして「分別瑜伽品」における真如の記述は『菩薩地』→「勝義諦相品」の理論構築とは異なった視点から真如の理論を提示しているとみなす。それは瑜伽行の実践そのものとかかわると考察する。そして菩薩の実践に関して、さらに『菩薩地』や「地波羅蜜多品」との関連を考察する。そこで瑜伽行派を「分別瑜伽品」でヨーガの骨格を示すが、思想的には「勝義諦相品」で龍樹の思想を考慮しな

がら勝義を理論化し、「地波羅蜜多品」で修道面の協議を整えたと結論する。

第七節 まとめ

般若経の空性理解が『菩薩地』において深化され、龍樹の思想への肯定・否定の両側面から関係した『解深密経』ではじめて、従来の大乘仏教の空性思想を統合的に理論化した。しかもそれは単に理論として独立するのではなく、瑜伽行派の実践の核となるヨーガとの関連が重視されていた。そして『解深密経』においてはじめて理論面と修道面から唯識思想が整備されたと結論づける。

結論

『八千頌般若経』、『瑜伽師地論』菩薩地、『解深密経』勝義諦相品の中に空性思想の思想史的展開を見る時、注目すべき点は以下の通りである。①声聞スプーティの菩薩化による大乘の優位性の確保、②ダルモードガタ菩薩の登場で般若経の思想を受け継ぎつつ勝義諦を再構築する意義、③スプーティとダルモードガタ菩薩を仲介とする三性説へのプロローグ、④瑜伽行派の経典戦略、以上の4点である。このうち①～③は、それぞれの章、節において詳細に論じられた通りであり、そのまとめとなっている。それらの考察にもとづき、④が最後に主張される。そこには阿含経の時代から経典の主役となるが多かったスプーティ、般若経の広まりとともに受け容れられたダルモードガタ菩薩の仏教史における役割があったと論述する。『解深密経』は自らの空性思想を「三性説に集約するために説得力のある思想へと磨き上げるための一つの手段として」、この重要な二人の人物を経典に登場させたのであり、そこに瑜伽行派の経典戦略があったと推測する。

資料（使用テキスト文）

本論文で使用したテキストのうち、主要な『八千頌般若経』『瑜伽師地論』菩薩地、『解深密経』の参照部分のサンスクリット、チベット語文を資料として掲載している。

文献

1. テキスト

梵蔵漢の使用テキストの一覧（合計10点）を示す。

2. 参考文献

参考図書・論文の一覧（合計59点、和文と欧文）を示す。

審査結果の要旨

本論文は大乘仏教の空性思想を高らかに説いた初期般若経典である『八千頌般若経』、唯識瑜伽行派の初期段階の論書である『瑜伽師地論』菩薩地、唯識思想を明確に理論構築した『解深密経』のテキスト解説をしつつ、そこに見られる空性思想の展開を論じたものである。この思想史的連関自体は、論者の独創ではなく広く学界で注目され、考察されてきた。しかしその思想史の展開の途中で龍樹の思想（中観派の思想ではなく、龍樹独自の思想）を媒介させ、般若経と龍樹と初期唯識思想を思想史において考察する試みは独自の論考となっている。

しかも般若経に登場するスプーティとダルモードガタという人物を再度『解深密経』に登場させたことに、般若経を継承しつつ、龍樹と異なった独自の、そして正統の空性思想を樹立する瑜伽行派の意図を読みとるのは論者の独創的な解釈であり、従来の研究を超えた地平を拓いている。この視点の確保だけでも、本論文は高い評価を得ることができるであろう。

この視点を確保した根拠を論者は「歴史」のあり方に求める。論者はスプーティとダルモードガタに過去（阿含と般若）を語る役割を担わせ、過去との対話による未来への展望を求める歴史として瑜伽行派における経典制作があったとする。この歴史理解の視点を論者はE.H. カーに求めている。

しかしE.H. カーの歴史理解の態度のみで思想史解釈の視点を確保する態度には疑問を覚える。思想史理解の方法について、本論文に論考が見られない。しかも序論の第四節において「研究方法」という項を設けながら、それは単なる本論文の見通しを述べるのみであり、人文学の研究に必要な方法論の提示が理論的になされていない。

そもそも般若経と初期瑜伽行派の諸テキスト、そして龍樹の思想に見られる空性思想を構造的に知るのであれば、論者も参考文献に挙げている井筒俊彦の思想解釈の方法が綿密に考察されるべきではなかったであろうか。

このように方法論の問題を重視するのは、特段の理由がある。すなわち論者は仏教学において正統と見なされる、いわゆる文献学の手法を用いていないからである。このことは口述試問においても確認をし、論者は文献学とは異なった視点から仏教テキストを読む意志を示していた。そうであるならば、

方法論の詳細な提示が必要と思われる。

またテキスト解読においてテキスト批判が行われていない。文献学とは異なることを自覚する研究であるから、このことを否定的に評価する必要はない。しかし、参照したテキストが公刊された後に、その後に新たな批判テキストが多く公刊されている。それらのテキストを参照した解読作業が行われていないことは残念である。

しかし、サンスクリット及びチベット語の和訳は、先行研究を参照しつつ論者独自の解釈にもとづく和訳が提示されていることは評価できる。だがそれ故に、問題となる和訳も多い。例えば複合語の末尾の lakṣṇa を「特質」と訳したのは肯定できるが、言語認識を否定するときに vastu の alakṣaṇa についての記述があるが、この場合には lakṣṇa とは「特質」というより特質を認識領域で確認できる現象的な「形相」と考えられる。このように傍証を伴う緻密な訳語選定が検証されていない難が見られる。このような問題は、方法論を歴史的に限定したこととも関連する。文献学に拘らないのであれば、思想解釈の哲学的思惟が望まれた。

また龍樹の思想解釈が全体において常に配慮されなければならない論考であるにも関わらず、論者は『中論偈頌』をつまみ食いのように読んでいる印象が拭えない。あえて後の中観派から切り離して、龍樹の思想を解釈するのであれば、それなりの解読作業が必要であろう。しかしそのような考察の成果を論考から窺うことはできなかった。

方法論、テキスト読解に関して、問題点が多い論文である。しかし他方で、論者の独自の視点からテキストを読み込む努力はそれなりの成果となって論述されている。

初期瑜伽行派に関する先行研究多い中で、それらを参照しつつ、独自の論考を組み立てた本論文は、瑜伽行派研究において新たな成果を提示している。このような論考が学界に寄与することが期待できる。

よって口述試問における審査も勘案し、本論文を合格とする。